

にじぐみだより

第24号 平成30年 3月 16日

オール ライト (牧原雄志)

「思い出す」というのは、「忘れる」とワンセットだ。
「思い出す」は、「忘れる」のあとにしか起こらない。

最近、1年を短く感じるのは、日々を忘れまくるからなんじゃないか。
というくらい、忘れてしまうことの方が多い。
いや、最近に限らず、昔のことも覚えていない。
覚えているのはほんの少しのことくらいだ。
申し訳ないくらい忘れてしまった。
自分が幼稚園児だったころの記憶など、ほとんど、ない。
では、忘れてしまった時間は、なかったこと、と同じなのか？

2017年、秋のある日のこと。

地元の中学3年生の子たちが、幼稚園に来ていた。
家庭科の授業の一環で、一時間に満たない時間、園に来てくれていた。
もちろん卒園生もたくさん。懐かしい顔ぶれもたくさん。
きっとストレスも多いだろう、思春期の受験生。
でも、今日はみんなニコニコと笑って、嬉しそうに見えた。

それぞれ色々なクラスに入って、子どもたちと遊んで過ごした。
年少、年中、年長、それぞれ。

あるクラスに、ひときわ強い印象のある卒園生がいた。
もう、11年前になるのか。そのころ彼には支援の手が必要だった。
時に激しく手が出てしまったり、パニックになったりしていた。
ほぼマンツーマンで支援の先生と一緒にいた。

彼の入ったクラスには、今、支援が必要な子がいて、今日、その子はちょっと不安定で、たびたびパニックになり、まわりの声が届かない状況があった。
今や中学3年生になった彼は、その子を気にしてくれていた。
そして、学年みんなで歌を歌う、という活動のとき、その子はパニックになり、先生に抱かれていた。

彼は、そこに近づいてきて、その子と先生に、こう言った。
「ぼくも、こうでした。もっとひどかったと思います。だから、わかります。大きな声や音が苦手なんだと思います。遠ざけてあげてください」
先生が答える。
「ありがとう。きみはどうやってそれを克服したの？」
「だんだん、小学校に上がって、少しずつわかかってきて、大丈夫になりました」

その子は、それでも「みんなといたい」という思いの方が強くて、遠くに行くのはいやだった。みんなのそばにいて、少しずつ気持ちが落ち着いてきたその子が、でもやっぱりまたちょっと泣けてきたとき、彼が近づいて、言った。
「大丈夫です。きっと、この子は、大丈夫です。
ぼくも、大丈夫ですから」

中学生の解散時、集まって、「誰か感想を言ってくれる人？」と聞いたところ、彼は真っ先に手をあげた。
まわりから、「よ！○○ちゃん！」と笑顔で声が飛ぶ。
「○○ちゃんの感想は最後で！」とトリを任せられる。
周りに愛されてるんだなあとわかる声。彼も嬉しそうにニコニコしている。

彼は言った。
「ぼくがいたころより、今の幼稚園は、暴れてしまう子たちとかにしっかり対応できているような気がしました(笑)

どんどん幼稚園もよくなっているんだなあと思いました！
これからもがんばってください！」

周りから、「ナマイキ言っちゃって～！」という少しの笑いも起こった。
ぼくも笑った。
笑ったあと、思った。
そうだね。わかるんだね、きみには。
あの頃は、今よりまだ、支援とか、そういうことも、よくわかっていなかった。
世の中も、幼稚園も。
あのころ、きみを困らせたこともたくさんあっただろう。
やりにくいと思ったこともあっただろう。

ある日、パニックになったきみは、友達に手を出さざるをえなくて
とにかく止めに入ったぼくの顔を、血が出るまでがりがり引っかいた。
あのときも、ぼくがもっとうまくきみに声をかけることができていたら
きみはぼくを傷つけないですんだかもしれない。
傷つけてしまったぼくの顔を見て、涙を流し叫んだきみを思い出す。
顔の傷よりも、胸がやたらに痛んだことを、今、思い出す。
あのときはごめん。
ぼくは今でも、思い出すたび、あのときのきみに、そう思い続けている。
ごめんね。
もっと、ちゃんとできていたら。
ごめん。今、あらためてそう思う。
でも、これだけは確かだ。
おれたちはみんな、きみを愛していて、未熟ながら、一生懸命だった。

たとえば運動会、生活発表会、卒園式。
「大人にとって感動すること」でも、子どもにとっては、毎日の成長の一つ、
その積み重ねの一つだから、忘れちゃうことがほとんどだと思う。
でも、いいんだ。
「いつか忘れちゃうこと」、「忘れちゃうけど大切なこと」を、
ひとつひとつ積み重ねて、大きくなった。
きっと感動するような思い出じゃなくて、当たり前前の毎日にあった、
忘れちゃうような少しずつの積み重ねが、そういう覚えてもない日々が、
きみを、きみにした。
そう、大きくなった。

暑くなく、寒くなく、秋。
そんな今日。園庭に並ぶジャージ姿。

彼は、今日の感想を率直に語る。ニコニコと笑いながら。
彼がそうすると、みんなも笑う。
あのころ、きみと過ごした同級生たちも、今、いっしょに笑う。
ケンカした子も。引っかいた子も。
あのころのこと、忘れたかもしれない。
でも、今、屈託なく、一緒に、笑う。
もちろん、ぼくも。
そして感想の締めくくり、彼は「ぼくも3年間、暴れたりして、本当に迷惑をかけました！」と笑って言う。
みんな笑う。
ぼくも笑う。笑いながら泣きそうになる表情をこらえて、思わず答えた。
「迷惑なんて思ったことは、一度もないよ！
ただ、3年間、楽しかったよ！」

本当にその通りだ。
きみがいたことで、迷惑だなんて思ったことは、一度もない。
楽しかった。
忘れていたけど、はっきり思い出せる。そのことを。
そしてあれから11年。
彼の言葉は、なにより響いた。
「大丈夫です」

You are all right. きみは大丈夫。
Because, I'm all right. だって、ぼくも、大丈夫だから。

あげたものより、もらったもののほうが、ずっと多い。そんな気がする。

きみは大丈夫。
ぼくは大丈夫。

安心して、自由に、自分のまま、生きていこう。
あの子も、きみも、ぼくも。

ぼくたちは、みんな大丈夫だ。
彼が、そう、教えてくれた。

今日、卒園して、小学校へいくきみたち。

いろいろなことをやってきたね。
楽しいことだらけだった。
自分のままでやってきたね。
誰にも押し付けられなかった。
ひとりひとりの個性、みんな違うひとりひとり。
それがかわいかった。愛らしかった。
ぶつかりました。困りました。
それよりはるかにたくさん、楽しいことをした。
あさひこ幼稚園での日々。

忘れていい。
思い出なんかより、今を生きてほしいと、ぼくは願っている。
だから、ぼくたちのことも忘れていい。
ぼくたちが、忘れなきゃいい。忘れても、思い出せばいい。

その場では、ただ一生懸命やるだけ。
ずっとそうだった。
振り返らない。いつだって、今、だけ。
そして、時にふと、忘れていたことを、思い出す。
そんな、秋の日。

楽しいことをしよう。面白いことをしよう。したいことをしよう。
ずっと。きみのままで。
きっと、きみもいつか、思い出す。
忘れたままでも、きっとそのまま、きみの中にある。

大丈夫。
ずっと大丈夫さ。
たくさんの楽しいことが、これからきみを待っている。
ずっとニコニコ笑えるさ、彼のように。

また、もっと大きくなって、
いつでもいい。
気持ちのいい秋の日でもいいね。
きみがここに来てくれる日があったら、うれしい。
きっと、思い出すだろう。
何を忘れても、思い出す。
楽しかった、ってこと。
みんな違った、ってこと。
だからもっと、楽しかった、ってこと。
ああ、だからぼくたちはみんな、大丈夫だ、ってこと！

大丈夫、いつでも、ここにいる。
待ってるよ。
卒園、おめでとう。
みんなに、幸運のありますように！